

日本における「社会的連帯経済×協同労働」の探究のために

昨年度から今年度にかけて協同総合研究所では、連帯経済を研究する北島健一さん（立教大学教授/協同総研常任理事）を座長として、「社会的連帯経済×協同労働研究会」を3回開催しています。研究会の趣旨として、第1は日本における社会的連帯経済の理論と実践のあり方を深めること。第2は社会的連帯経済と協同労働を掛け合わせて何が生まれるのかという視点です。仮説ですが日本で社会的連帯経済を実装化していく上で「協同労働」の働き方が社会的連帯経済を推進する個人・団体の主体形成においてキーポイントになるのではないかと考えています。

私は日本での社会的連帯経済の具体的実践として、「子ども食堂」「フードバンク」「地域通貨」「コミュニティレストラン」等をイメージしていました。これらは貧困・格差・排除などの社会的課題を地域で連帯して包摂的な社会をつくる、共同体をつくる、循環する社会・経済をつくる実践ですが、そこに「労働」の視点があまり語られることがないように感じています。そこで「協同労働」の視点と「社会的連帯経済」を掛け合わせたときに、何が見えるのかを挑戦的に考えるのが本特集の目的です。

今まで日本で紹介される社会的連帯経済の理論・実践としては、海外の理論・事例から深めることが多かったように思います。本特集ではもちろん海外の理論と実践も紹介するとともに、日本で社会的連帯経済を推進するために、日本における社会的連帯経済の実践を考えることや協同労働と掛け合わせることを意識して特集を組んでいます。

本誌の構成として大きく2つに分かれます。

第1は「社会的連帯経済の基本的視座」についてです。これらは「社会的連帯経済×協同労働」研究会の北島座長の解題、富沢報告「世界変革と社会的連帯経済」、スペインバルセロナを中心としたカタルーニャ地方の連帯経済の実践を本でまとめたものを訳した廣田裕之報告にあたります。第2は「日本での社会的連帯経済の実装化のための視座」として、古村報告「『労協法』を契機とする、市民主体の『第2期地方創生』と、その地域経済戦略の構築に向けて（私案）」、大阪「暮らしづくりネットワーク北芝」と神奈川の「藤野マネジメント」の取り組み、長年の労働者協同組合の研究から日本の社会的連帯経済への展望を構想した津田報告「労働者協同組合への多様な道」、毎年地域課題から仕事をおこしてきた労協センター事業団の草津みんなの家の田中報告だと考えています。

第1の「社会的連帯経済の基本的視座」については、「社会的連帯経済とは何か」「社会的連帯経済が目指す地域像・社会像」「社会的連帯経済の国際動向」「社会的連帯経済の歴史」等の社会的連帯経済の性格や枠組みを捉える上で必要な情報を掲載しています。

第2の「日本での社会的連帯経済の実装化のための視座」として、地域住民の智恵と経験を基に「歴史・文化・自然」を「力」にして持続可能で循環する地域づくりを、仕事づくり・学びづくり・拠点づくりを住民主体でつくることだと思っています。この視点は特に北芝や藤野の取り組みから深められると思っています。それとともに労働者協同組合の理念・実践と、協同労働で地域の人と人が連帯・協同する仕組みをつくっていることを、津田報告および田中報告から考えることができるのではないかと考えています。そして社会制度と結びつけ、協同の実践を地域づくりと結びつける戦略を古村報告は提起しています。

「社会的連帯経済」という用語以外でも同じような言葉として、「変革型経済」「つながりの経済」等とも言われます。これらの言葉は人と人とがつながり、住民・市民が主人公となり社会をつくっていくことが要旨であると考えています。そのときに社会的連帯経済を推進する研究者が「これが社会的連帯経済だ」と実践をラベリングするのではなく、実践をしている方々が「これは社会的連帯経済だ」と自認するプロセスのなかで、社会的連帯経済の実践とそれに伴う理論が発展していくのではないかと今回編集した立場から感じました。これは北島座長の座長解題のなかで「社会構成主義の視点から社会的連帯経済を捉える必要性がある」(本稿に本内容は掲載せず)という発言があり、この視点と大きく重なるものであると考えています。

暮らしの上で協同のあり方は見えやすいですが、経済活動において競争の原理から協同・連帯の原理・思想に変えられるかどうかは社会的連帯経済を実装化するときには大きなポイントになると感じています。利益を最大化することを最優先させる資本主義経済下で、そこを乗り越える社会的連帯経済が、資本主義経済の仕組みよりも明確に「ここがいいから社会的連帯経済を展望するんだ」という多くの共感を生み、実践が生まれる仕組みづくりが必要だと感じています。その仕組みをつくる際に、協同労働や労働者協同組合の理念・実践・経験が活きるのではないかと感じています。具体的には、尊厳ある人間として協同で生きる・働く(意見を言える・居場所がある・役割がある・失敗が許される・挑戦ができる・弱さを出せる・相談できる・地域で生きる等)ことがあり、これらの考えが資本主義経済から社会的連帯経済を推進する大きな動機になるのではないのでしょうか。

この仕組みを生み出す1つとして、労働者協同組合法をどう活用するのかは別途、深めていきます。

相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)